

会長賞

Tongbairattana Nathtachaya (トンパイラッタナ ナッタチャヤ) タイ

東京国際日本語学院

エンジェルのように

日本へ来る前に、私は看護師として国際病院で働いていました。そこでは、いろいろな国の患者さんを看護しました。アラブ人を初め、日本人、中国人、エチオピア人などでした。

主に、治療について説明したり、手術した後のケアをしたりしていました。

国や民族、宗教によりそれぞれ習慣などが違います。例えばタイや日本の患者さんはだいたい病院で決められた時間通りに食事をします。でも、アラブのある患者さんは朝 10 時頃起きて、11 時頃朝ご飯を食べ、午後 4 時頃昼御飯、9 時頃晩ご飯を食べていました。また毎日同じ時間にご飯を食べるわけではないので、薬を出す時間は…ちょっと困りました。

手術の前の患者さんのようすはどうでしょうか。アラブ人は病室の床に座って 20 分くらいお祈りをしていました。タイ人は家族や友達と抱き合ったり、手を握ったりしました。日本人はスマートフォンを使ったり、テレビを見たりしていて、緊張している表情があまりみえませんでした。

手術の後はどうでしょうか。アラブ人に「いかがですか。まだ痛いですか。」と聞くと答えはいつも「hamdulenla」、—「神様の御心のまま」でした。痛いかどうか分からないので、もう一度「あのう、痛み止めをおのみになりますか」と聞くと「はい、お願いします」という答えが返ってきます。日本人は「痛くないわけではないんですが、できれば薬は飲まない方がいいので…」と言いました。日本人は我慢強い人たちだと思いました。

このように考え方や習慣が違う人たち一人一人に配慮しながらの看護がとても大切だと思います。

また、あるとき次のような経験をしました。

80 歳くらいのアラブ人の患者さんをケアしていたとこのことです。ある日、「1 時間ぐらい寝たいので、じゃましないでください。」と言われました。1 時間後患者さんの部屋に入りました。でも、二度と起こすことはできませんでした。30 分ほど前に心臓麻痺で亡くなっていたのです。ほんとうにショックでした。失われた命はどんなことをしても取り返すことはできません。たとえ短い時間でも見守りは欠かせない—看護師として働く私には重い経験になりました。

また、ある時はこんな患者さんもいました。

その日は猫の手も借りたいほど忙しかったのですが、「すみません、テレビをつけてください」「エアコン、消してもらえますか」など、20 分毎にナースコールが鳴りました。他の患者さんのケアを気にしながら走り回って、もうくたくたに疲れてしまいました。それでも気になって、帰る前にようすを見に行きました。

「今日はたびたび呼んで、ほんとうにごめんなさい。一人でいると、まだ死にたくない、死にたくないって、怖くて、心細くて…。でも、看護師さんの顔を見るととても安心できます。あなたは、私のエンジェルなのよ。」その言葉を聞いて私はすっかり疲れを忘れてしまいました。

実は、私は自分自身の希望というよりも、母に勧められて看護師になりました。そんな私でしたが、いろいろな経験をさせていただき、世話をしていると思っていた患者さんたちから大きな力をいただきました。そして、本当の看護師に育てられてきたと思います。

これからも命の重さを忘れない、患者さんの心まで分かる看護師を目指して努力を続けたいと思っています。